剣道における段位取得に関する考察

Consideration about the grade acquisition in kendo

1K03A102-1　　氏名　宍戸　良謙

指導教員　主査　土屋　純　先生　　副査　矢野　尊之　先生

緒言

筆者は幼少より剣道を続け、各年代において段位を取得し、現在剣道三段である。今後一生涯剣道を修行していくうえで昇段を目指し、将来は八段取得を目標としている。八段は剣道を修行している人でもほんの一握り人間しか取得できず、剣道を学ぶ者にとって大きな目標となっている。筆者が八段取得を目標とする理由は、正しい剣道を学び、自分という人間の精神を剣道の修行を通して磨き鍛えたい、剣道の指導者になった際に剣道の特性から得られる素晴らしさを多くの人に広めたいからである。これまで修行してきた剣道について生涯を通して探求していく、そのために、本研究において文献講読によって段位取得に関して不明な点を明らかにしてゆきたい。

第１章　剣道とは

ここでは剣道の目的・特性、試合・段位審査の意義、日本剣道形の意義を明らかにした。古来より、剣道の目的は様々に表現されているが、一貫しているものは、全日本剣道連盟の「剣道の理念」、「剣道修練の心構え」である。これらの目的では「人間形成」について示されているが、ただ竹刀を振っていれば人間形成ができるというわけではない。剣道の精神的特性や身体的特性を理解し、日常の稽古、日本剣道形の稽古、試合、段位審査で実践し、社会でその成果を展開してこそ剣道が人間教育としての存在価値が高められるといえる。

第２章　段位審査とは

ここでは各段位における受審資格、審査基準、審査方法、称号について考察した。段位審査は、全剣連によって３度の改正を経て 2000 年に「剣道称号・段位審査規則」が制定された。第 17 条に審査基準が示されているが、抽象的で曖昧な表現といわれているため、広辞苑を引用しながら筆者自身の見解を示した。各段位によって受審資格、審査基準、審査項目が異なり、昇段を目指すにしたがって基準が明らかに難しくなっている。剣道の本質を探り、正しい剣道を修練していかなければならないといえる。2000 年の改正以後、八段範士の称号が剣道最高峰の称号となり、今まで曖昧であった範士、教士、錬士になるための必要な資質・能力が明らかにされた。この改正に伴って基準が明確にされ、以前よりも格段に狭き門となっており、八段でもとうとう範士になれないという例も出ている。

第３章　段位取得のために

ここでは各段位を取得するために必要な技術や心構えと八段合格者の体験談や審査員の重要視している点を考察した。昇段するための心構えと技術についての見解を示したが、八段に至るまでの道は険しく、各段位で修練した技術の積み重ねの究極が八段であるからこそ、合格することが困難であるといえる。ここでは、技術や心構えについて、段位取得の指針としてだけではなく剣道そのものの修行の過程や指導のために生かせるようにも示した。明らかになった点は、段位審査に合格するために剣道を修行するのではなく、正しい剣道を修練していった結果に、姿勢、態度、気位、品位、風格などの諸徳目が養われていくということである。昇段するために必要な技術や心構えは、各年代において習得しなければならないそれらといえる。

第４章　段位取得のための自らの課題と解決策

ここでは今後の段位取得のために、自分自身の剣道とその心構えについての課題を探求し、解決策を見出した。自らの剣道における過程を振り返って課題を抽出し、第三章で考察した各段位に必要な技術と心構えにあてはめて考えた結果、課題は山ほど抽出することができた。全体の解決策としては、堂々とした気勢、態度をしめせるように心気力一致した剣道を目指すことが必要であり、そのために、剣道の基本を原点に返って徹底して修練し、自分自身の年齢にあった剣道の修行をしていくことが大切といえる。そのように修練していった結果、段階に応じて段位はついてくるものだと考える。

終わりに

考察の結果、剣道の奥深さ、段位を取得することの難しさを改めて感じることができたと同時に、今後の自分自身の課題を見出すことができた。段位取得について不明な点を明らかにしてきたが、それは各年代において修得しなければならない１つの目指すべき方向性と考えたい。今回の研究を通して培った心構えをもって今後剣道の基本を修行し、結果として八段を取得できれば幸いである。